

### 子供たちにも親しめる

## 文化資料館に

佐々木 文化施設の面はどうですか。  
市長 一つは、向日市文化資料館ですが、この5月2日に完工式を行って、11月3日の文化の日オープンを予定しています。乙訓地域は、長らくの歴史があり、多くの文化遺産を持ち、それを守り伝え、その中で市民文化を創造していききたいという事で資料館を建設したわけです。

もう一つは、資料館と併設して、市民の知性と教養を高くむねとして市立図書館をも建設したわけです。こちらも同じ文化の日オープンを予定しています。

佐々木 その文化資料館へ行けば、どんなものがみられるのですか。

市長 そうですね、向日市から出土したさまざまな貴重な文化財を展示するほか、それとあわせて、長岡京市や大山崎町から出土した文化財も展示しようと思っています。

そこで、地域の資料館の特長をだすために、長岡京をメインにしたものを展示しようとも考えています。具体的には、乙訓地方の文化財分布模型を正面に置いて、誰でも歴史的な遺物がどこにあり、私たちの郷土がどういう歴史を経てきたかが一目でわかるようにしたいと思っています。それと、長岡京朝堂院の復元模型や内裏正殿復元模型も置きたいと思っています。

また、展示ばかりでなく、子供たちにも親しんでもらえるように、玄関の所に朱雀門を据え、そのくぐり戸から中へ入ることができるようになっています。

佐々木 きっと子供も喜ぶでしょうね。それとどうでしょう。出土品の展示交流など、国内はもとより友好を深めている中国の各地にある博物館などと交流を進めては。

市長 それは、なかなか興味深い提言ですね。そうすることによって、一層友好の輪が広がるかもしれませんね。

佐々木 図書館はどうですか。

## 国立民族学博物館教授 佐々木 高明

昭和4年11月17日生 文学博士  
東・南アジア農耕文化史専攻 主な調査・研究地域は、東南アジア、南アジア、中国 昭和38年以来、インド、ネパール、東南アジア、中国、日本各地などで調査・研究に従事 著書に『熱帯の焼畑』『稲作以前』『照葉樹林文化の道』『日本の焼畑』など。

## 甲南大学助教授 久武 哲也

昭和22年2月24日生  
日本・アメリカの歴史地理学・文化地理学専攻 主な調査・研究地域は、日本・アメリカ大陸 昭和46年以来、日本、フィリピン、メキシコ、アメリカ合衆国などで調査・研究に従事 主要論文に『岩絵地図・砂絵地図-アメリカ原住民の空間認識とその土着的表現様式-』ほか

## 向日市長 民秋 徳夫

### ライフスタイルに合った 住みよき町に

佐々木 市民の多くは意外に向日市に住みたいと思われているし、非常にいいところだと思われています。それは、自然の美しさとともに、住みやすい町という印象を持っているからですね。その住みやすい町というのは、どういうイメージなのでしょう。

久武 なかなかむずかしいところですが、一つは家族構成とか、年齢構成とか、かなり違いますので、一概にこういってもいいというわけにはいかないと思います。まあ言えることは、家族構成、ライフスタイルに応じて、それぞれ住みやすさというもののイメージは違ってきていると思えますね。

つまり、単身者、子供が小学校にはいる前の乳幼児のいる世帯、子供が小学校から中学校までの世帯、高校生、大学生以上のいる世帯という4つの大きなライフスタイルがあって、その上におじいさん、おばあさんのいらっしゃる3世代の世帯があるわけですね。それぞれに、住みたいあるいは住みやすさというものの意識が違うと思えますね。

市長 ということは、さまざまなライフスタイルに合った施設や設備が整っていることが、「住みよき町」という意識につながるんですね。

佐々木 そうですね。そのほかに生活の便利さということ、住民のふれあいということが必要でしょうね。近隣のおつきあいの輪をひろめていく手だすけということが必要だと思えますね。

久武 アンケートをみても、そのおつきあいのきつかけについては、いろんなケースがありますが、たとえば、子供を通じてと

### 地域社会に根ざした 市民文化の創造

佐々木 向日市では、古い市民の方も、新しい市民の方も、ここ向日市に住みついていこうという意識が高いわけで、その意識を市としてつなぎとめていかねばなりません。そのためには、共通の文化を考える場というものを、いろんな形でつくっていくことが重要だと思えますね。

久武 そうですね。文化施設の中心的なものとして、資料館や図書館があり、各地区には公民館などがあるわけですが、それだけではなく、自由に集まれる「ひろば」的なものをあちこちにつくっていくことが必要ですね。

市長 そのふれあいの生まれる「ひろば」的なものとして、昭和52年から「向日まつり」なども行ってきています。また、ふれあいを盛り上げる意味で、「向日ふるさと音頭」や「市民の歌」や「市民憲章」をつくってきたわけです。

もちろん、文化資料館や図書館もふれあいの場となることはいうまでもないのですが、昭和63年国体に向けての体育館建設にしても、健康づくりの面ばかりでなく、ふれあいの場となるような多目的な施設にしようと思っています。

このように気軽に利用できて、参加できる施設や催しを行うことが、ふれあいのき

つかけとなり、小さな輪が大きな輪になっていくことが、新しい市民文化をつくることになるのだと思っています。

佐々木 私もそう思いますね。市民文化の形成というのを考えると、ふれあいの場をつくるのがなにより必要ですけれども、それと同時に、向日市としてのシンボルになるものがやはりいると思えますね。

そういう点で、長岡京遷都千二百年記念事業の一つで、文化資料館や図書館を建設したことは、シンボルをつくるという意味で大変よかったと思います。体育館もそうなんです。向日市としてのシンボルがいくつかできてきて、「私たちの向日市」と考えが定着していくことが、市民文化の育成に大変役立つと思えますね。



佐々木 高明



久武 哲也



民秋 徳夫

